

## 秀 賞



### 悔しさから学んだロードレース

青森県弘前市立東中学校

二年 小山 瑞 樹

僕は、今年の夏、人生初の自転車ロードレースに挑戦した。「ヒルクライム岩木山」このレースは、普段自転車で走ることのできない「津軽岩木スカイライン」の六十九のカーブを自転車で登りきるといふ国内でも有数の過酷な大会だ。このレースに参加しようと思ったのは、ずっと欲しかった念願のロードバイクを手に入れたことがきっかけだった。せっかくのバイクを披露する機会が欲しかったのだ。でも、それだけではない。ちょっと恥ずかしくて本人には言っていないが、毎年この大会に参加している友達を「カッコいいな」とあこがれていたのもあった。僕は一カ月くらい前から大会の練習を始めた。といつても、一週間に一回、岩木山のふもとの神社まで自転車を走らせるという、とても楽なもので、大会でさまざまな姿にならないければそれでいいやという軽い気持ちだった。

ある日、友達と一緒に練習することになった。大人も十人ぐらいいた。最初のほうこそ、集団についていたものの、二キロメートルぐらい走り、登りが急になると、僕はついていけなくなった。悔しかった。でも、楽家の僕は、まだ「なんとかなるでしょ」と大会までの時間を今まで通り、ただなんとなく過

ごしていた。

大会当日、受付を済ませ、十分ほどランニングをしていると、友達を見つけた。合流し、自転車のアツプを一緒に行き、スタート位置についた。スタート場には大勢の人が集まっていた。僕たちもなるべく良い場所を取ろうと前の方へかき分けて進んだ。数分後、十五キロメートルの部の人たちがスタートし、僕たちの目の前を通り過ぎていった。車と同じくらいのスピードでもかっこよかった。自分では緊張していないと思っていたが、サイクルコンピュータを見ると、僕の心拍数は、百四十まで跳ね上がっていた。正直びっくりした。次は僕たちの番だ……。

「3、2、1。」

選手みんなでカウントし、レースが始まった。スタート付近は平らなので、こぎやすい。僕は全力でペダルを回した。ところが、ゲートをくぐった瞬間、登りが始まった。でも、まだ、僕は余裕があった。少しは練習したかきがあったのかもしれない。心拍数も安定している。

少しすると後ろがざわざわしてきた。「大丈夫?」「頑張れ!」振り返ると、ついさっきまで一緒に走っていた友達が、落車していた。カーブを滑ったみたいだ。僕は前を向いた。「友達の分も頑張らないと。」ところが、一、二分も走らないうちに、さっき落車したはずの友達が僕の前を走っていた。「大丈夫?」と聞くと「うん。」と一言。そして、友達は思いっきりペースを上げた。僕はついていけなかった。友達は、まるで何かを決心したような表情をしていた。体中からオーラが出ていた。僕も負けてはられない。集団についていった。四十番目のカーブで、友達とは、もう一カーブの差がついていた。僕の足はもうパンパンに張っていて、自転車もフラフラだった。水分を補給しようとし、こぎながら給水した。

ところが、ケージにボトルを戻そうとしたとき、地面に落としてしまった。僕は焦って停車した。瞬間、右足に激痛が走った。足が、つってしまったのだ。立とうとするが足がいうことをきかない。悔しくて道端で泣いている僕に、たくさんの人が声をかけてくれる。「頑張れ、もう少しですよ。」僕は自転車に乗った。足は悲鳴をあげていたが、進むしかない。ペダルを回し続けた。残り五カーブ……。急に風が強くなる。前に進まない。前を走る人を風よけにして体力をためた。残り二カーブ……。ギアを二枚重くして思い切りダンシング。あと一〇〇メートル……。『ギヤァ。』あまりの痛さに大きな声で悲鳴を上げた。今度は左太ももと右ふくらはぎがつった。でもやるしかない。痛いのを我慢して力を振り絞った。前を走る二人を抜いて、ゴール! 結果は二位。友達は一位で、僕とは六分もの差がついていた。でも、うれしかった。

「ヒルクライム岩木山。」

この大会に挑戦しなければ、今の僕はなかったろう。苦しかった。だからこそ、「何があっても進み続け、あきらめない」ことを学んだ。苦しかった。だからこそ、「練習なしでは、良い結果、良い成績は残せない」ことが分かった。当たり前のことだ。でも、身に染みて「体感」できたのは初めてだった。大会が終わったとき、うれしかったのは、二位になれたからではなく、今までの自分から変わった瞬間を感じたからにちがいない。一つの挑戦が僕の気持ちをこんなにも大きく変えるとは思わなかった。僕は今、いろんなことに挑戦したい気持ちでうずうずしている。